0007952419　XB10-299

博物館藏版

教草　第廿四
蜂蜜一覧

凡そ日用に供する衣食の如き人皆之を衣し之を食して何たるを知らさること是れ其物品を改正良善にするの術に暗く従て新規の発明なく國産を繁殖せしめ又各其業に就く事を知らす故に父兄たる者其子弟をして幼時より各業の大略を知らしむるときは他日脩産の基となるべし嚮に明治六年澳國博覧會出品の際に乗し各種職業の教草を編成せしめ画圖を加へ以て童蒙に便せり然に舊版第一より第廿四まで既に八年七月の火災に罹りしにより今之を再刻し兼て従前の謬誤を正し遺漏を補ひしむと雖も其圖の舊版を再刻する者の如きは鮮明ならさるところあり看者之を恕せよ且我國産の多き此一部の盡す所に非す此餘の如きは以て他日に讓る

明治九年二月

田中芳男記

第一　稲米
第二　糖製
第三　養蚕
第四　生糸
第五　樟虫
第六　野蚕
第七　葛布
第八　苧麻
第九　草綿
第十　織緯草木
第十一　索麪
第十二　葛粉
第十三　藍
第十四　青花紙
第十五　製茶
第十六　烟草
第十七　漆
第十八　蒔繪
第十九　蠟
第廿　白桝
第廿一　疊表
第廿二　香蕈
第廿三　製紙
第廿四　蜂蜜
第廿五　油
第廿六　臙脂
第廿七　澱粉上
第廿八　澱粉下
第廿九　褐腐
第卅　豆腐

版權所有

教草 第廿四 蜂蜜一覧

深山大木の樹空又ハ岩石の間に巣を營ミ樵者稀に其蜜を得ることあり此を山蜜といふに至ては上品なりと雖も販賣するにハ足らず

園養のものハ其初め野生のものを捕て久しく家に養ひたるものにして是より採るを家蜜といふ通常の蜂蜜是なり石州にてハ初め山中の大樹に巣を營ミしを「ラッポ」といひて藁にて圓く編たる物に砂糖などを入て其処に釣り置バ衆蜂此中に集る後持帰りて戸外にて養ふ紀州にても養ふ匣ハ圖の如く杉の四分板の其外部ハ削らず内部ハ挽削し其前後を揚戸とし戸の下に蜂の出入する小孔を穿ち底板ハ前後一寸程縁を出し蜂の棲止るに便をよし雲州にてハ同大の匣を幾個も造て置き房の嵩むに隨ひ之を連疊ね是を継箱といふ又風雨の内に入るを防ぐ為に前低く後高き四柱の臺を造て其上に匣を居へ置く或ハ又臺を用ひず人家の軒下に掛陰などに釣ても養ふ野州にてハ欅を刳るにハわし巻き軒下へ横につり其内に養ふ蜂の種類に至てハ各地同じからず今其一二を挙ぐ

信州木曾の産ハ全身灰黄色あり是を「ヘボ」と云ふ又黄斑紋の物あり「トラバチ」といふ薩州の産ハ性至て温和同州日置郡の産ハ茶褐色にして大さ三四分なり雲州の産ハ形状薩州産のものに同して性温和にして人に親しむ之を「キンバチ」といふ又雲州にハ「ヤマミツバチ」「クマミツバチ」の二種あり性鋭にして養ひ難し

一種横條頗る黒くして蜜蜂よりハ稍大なるものあり多く堂中に雑居して蜜を喰ふ大抵八十八夜前より六月の末に至り一堂に八九十も居ることあり是即ち雄蜂にして之を「クロバチ」といふ八十八夜前より此蜂衆蜂にまぢりて匣より出入するを見れバ早近きうちに分封ありと知るなり又「アカバチ」といひて勝りて大なる蜂ありて屢来て蜜蜂を害す注意して取除くべし又褐色に淡黒斑ある蛾あり七八月の頃蜜の香を知て匣中に入り蜜を喰ふ且羽を振ふゆへ蜂を乱すことなり是又注意して取除くべし

蜜蜂の中に将軍と唱ふる肥大なる一の雌蜂あり是ハ房の中心に留りて居て敢て戸外に出でず唯群蜂を指揮して窠と蜜を造る要務を號令す此蜂大抵一房中三四個を生じて分封ある時衆蜂三分の一ハ之に從ひ去る故に旧房の蜜ハ自ら減るに依て生長せざる前に之を知るにハ堂内に蜂の塊をなせる半より下へ霧を吹き入れ數多の蜂上面に登る時に彼房の下部に乳頭の如き形の窠あり是将軍と成べき蜂子の住む処なれバ一個を残して其餘ハ截去べし若多く分封を欲するものハ敢て截去に及バず

此の截残したる窠より生じたる新将軍大抵八十八夜の後天氣清明の日を卜して午時前に匣より出づ衆蜂亦之に從て分出づる是を分封といふ此時遠く遁れる為に水を澆き蜂翅を濡せバ人家の簷下或ハ庭樹に簇て集り殆ど鞠の形を為す此に於て新匣を持行き帚にて掃ひ落し養へバ此中に房を造て蜜を醸して一個の蜜堂となる如此して年々匣數を増し養ふ

此蜂春の彼岸より十月中旬までの間樹脂と蠟分あるものを多く採来り淡黄

蜜蜂ハ其形黄蜂に似て小く長さ漸二四分全身微黄色毛茸ありて脊ハ淡黒羽ハ灰白色あり此蜂人觸ると雖も螫こと少く若し螫ときハ刺脱して死す抑蜜蜂にハ野生と園生とありて其野生者ハ黄褐色にして稍透明せる房を造る其形扁平にして両面に多くの小窠あり是を側面立連ね互に軸を以て繋ぎ或ハ其一隅を堂に接して造り小窠ごとに卵を着け花の蜜を採来て蜂子の食餌となし上に白臘を覆ひ又冬月の粮に充む為に別の窠に多くの蜜を貯ふ蜜堂に出入する口の外に四五個看す蜂ありて出入を撿査し他のものゝ入を禁ぎ且空手にて帰る蜂ハ敢て中に入るを許さず其怠を責るに似たり

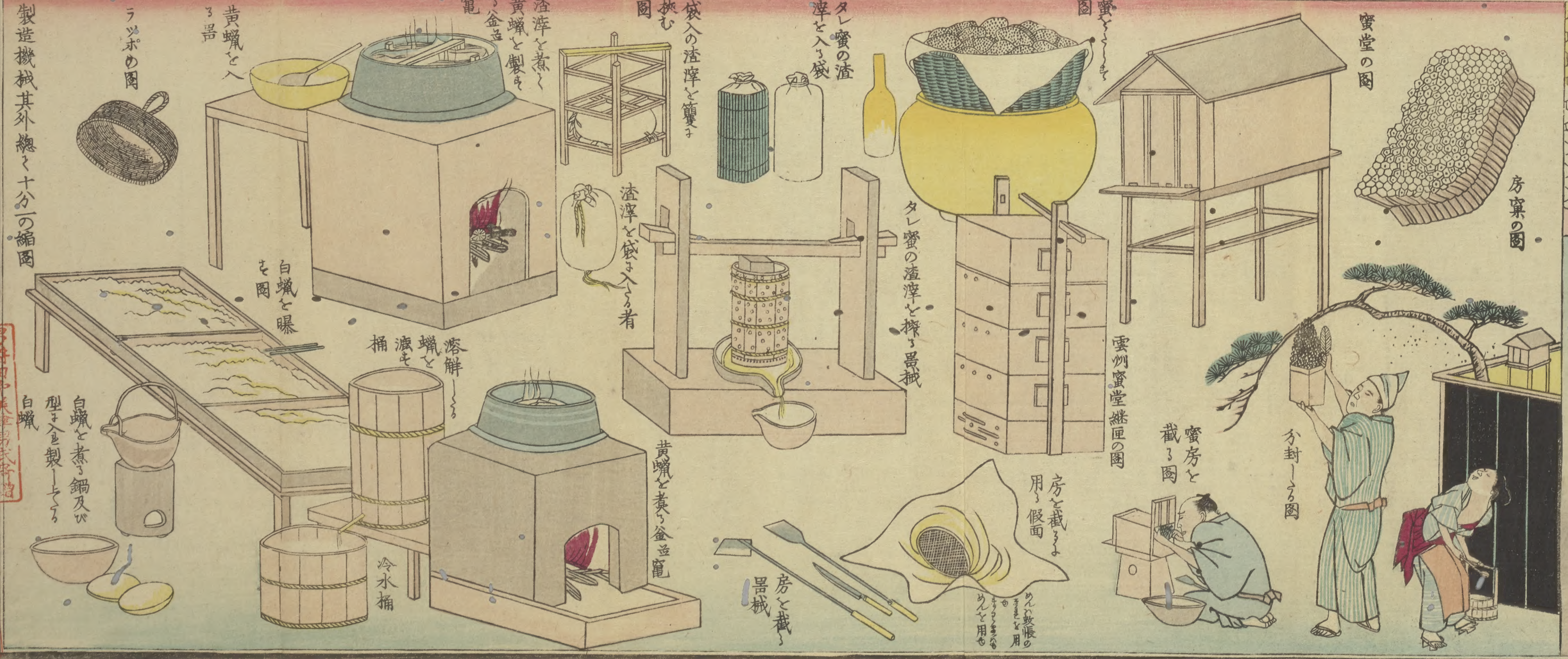
十月の末より翌二月頃まで堂中に蟄して彼蜜を食ふ故に蜜を截取る事多きに過るときハ動もすれバ飢に及ぶ事あり此時ハ皿に蜜を盛て堂に入て其不足を補ふ且寒氣を恐るゝものなれバ藁にて堂を包ミ暖所に置なり

蜜を採るにハ大抵夏至の六月下旬後房の三分二を截採て其一分ハ残し置なり防州にてハ秋の彼岸前後を適度とす此を截るにハ蜜堂の後面の戸を叩けバ蜂皆前面に去る此に於て戸を開き小刀にて隨意に截採て匣を前に向け直し置バ元の如く房を造る然しながら一時に前後左右を截らぬ様注意すべし若前後より一時に截採れバ蜂来て人の面を螫ことあり故に圖の如く粗布にて造りたる假面をかぶり其業をなすべし又手の不及ところハ器械にて撥出すなり截採たる房ハ布を敷たる竹籠或ハ篩の中に入れ此儘上に安じ日温の処に置バ蜜自ら流出る其色黄褐にして飴の如し此の如くして採るものを「タレミツ」といふ最上品なり又山間に養ふものハ村里のものに比すれバ量重くして色も濃く冬月ハ凝固す扨其渣滓ハ布の袋に入れ圖の如く搾木にて搾るときハ其蜜を得るといへども其蜜ハ蜂子蜂をも混ずれバ下品とす之を「シボリミツ」といふ夏月に至りて酸味を生ず

全く蜜を採て取る渣滓ハ再び布の袋に入れ釜中にて沸湯の沸騰に随ひ蠟分溶解して浮ぶを汲取て別の桶に冷定して後鍋に入れ煮て溶解し型に入て凝固せしむ之を黄蠟といふ又之を白蠟にするにハ釜に入れ適宜の水を加へ煮て溶解せしめ撹て汲出し竹箸にて攪攪して水桶の中に淋灑する時ハ片々小塊となる之を筵上に移し日光に曝し乾して轉廻両三度なせバ白蠟となる若日光甚強けれバ時々水を噴掛け其溶解するを防ぐなり又雲州にてハ石灰百匁を藁にて焚き此灰と共に水七合を混し布袋にて濾過し此灰汁ハ黄蠟五斤を晒すべし此割を以て黄蠟と共に釜に入れ湯を加へ煮て溶解せしめ桶に移し暫く洗静せしめ後水桶中に瀝し箸にて撹攪すれバ凝固する之を曝匣に擴げ日光に乾すこと斯の如く三四度曝すときハ清潔なる白蠟を得るなり

蜂蜜ハ安藝、周防、長門、日向、薩摩、筑前、石見、出雲、伊勢、紀伊、信濃、佐渡、等其他多く西南諸州より産出す其蜂を蓄養するの法に至てハ大抵相同じく只疏密あるのミ今出雲國吉村耨一郎紀伊國菊地喜太郎の記するところと諸書に論説するものを参考して其概畧を誌す

明治五年冬　丹波修治　編撰
溝口月耕　圖画
明治九年春　小林常賀　校訂



田中芳男 昭和七年
B 65992
東京大学総合図書館